



出雲の阿国

中之卷

有吉佐和子

中央公論社

出雲の阿国〈中之巻〉

©一九六九年
検印廃止

定価五五〇円

昭和四十四年十月五日印刷

昭和四十四年十月十五日発行

著者 有吉佐和子

発行者 山越 豊

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二丁目
電話（芸）五九二二（代）

出雲の阿国

中之卷

題字
花崎采瑛
見返繪
中尾進

第十三章

三九郎が長い間もくろみ、守り続けていた夢は終っていた。もはや梅庵の生きている限り、天下さまの傍に寄りつくことはできない。彼は梅庵に対する怒りに燃え、眼の縁を黝くろませながら、しかしどうする術も持たなかった。お国一座を捨てて昔通りの一人身に戻るには、今までの七年がまるまる無駄だったような気がする。何がなし浮かれ気分の中ではお国三九郎が小屋がけすれば結構樂に暮し向きは立つ。三九郎は怒りの焰が衰えても黒い煙がいつまでもぶすぶすと立つのを自分でも持て余しながら、ともかく五条の橋のたもとに大騒ぎして建てた小屋を早急に他の場所に移さなければならなかった。

勘じとまめも梅庵の劍幕に驚き懼おそれ縮みあがっていたから、彼らも早々に五条の橋からは引揚げたと思つて、お国にも三九郎にもそれを促した。

「どこへ行こう」

「四条河原はどうである」

「ふむ」

三九郎の思案では西の京の北野天神がちらと頭をかすめたが、ここでわざわざ梅庵に当てつけがま

しく彼の最も嫌うところへ小屋がけするのは、決していい結果を招くとは考えられなかった。鴨の河原は五条も四条も同じように広く、土地に所有権がなくて自由に使ったり住みついたりできる点でも同じ条件を持っていた。しかし五条が京と伏見城を繋ぐ幹線であるのに較べて、四条は祇園社の門前通りという最も繁華な京の町筋に続いて、古く平安朝から遊芸の者が集い、^{せう}蔭がけの粗末な小屋でも常に興行が行われていた。いわば常打ちの小屋をかけるには当り前の土地なのである。

勘じとまめの二人が四条河原がよいと考えたのは、もっと単純な理由からだった。五条の橋のたもとから一番近い。材木を多く使った小屋を移すのに運ぶ手間が楽だったのである。すでに四条河原には似たような^{なうわい}生業をしている仲間がいるのも彼らには心強い。

「よからう」

と三九郎が背いたのは、四条にある常打ちの小屋のどれよりも自分たちの小屋の方が立派だから、鴨の河原でも人目に立つだろうと考えたからであった。

実際、三九郎の思った通り、観客のために敷いた蔭よりも高く造った舞台と、板で囲った小屋、入口を隠す板塀と、それに掛けまわした浅葱色の幔幕は、四条河原ではかなり人目を惹いた。念仏踊りの唄声がその小屋から洩れると、蔭がけの小屋小屋でも一斉に聴き耳を立てる。

もっともそれは三九郎のささやかな優越感を満足させたに止まって、都中の人氣をひき寄せるまでには到らなかった。なんといつても朝鮮の戦がぐずぐずとしていて、先年来小西行長が兵糧の欠乏によって現地で休戦してしまつて以来、大明国の使節との和議も一向にはかどっていないのだ。秀吉が大坂城の北政所から二の丸さまを始めとして、一族愛妾^{いとこ}悉くひき連れて華やかに吉野山へ花見に出かけたりしたのは、三九郎たちが、五条の橋を追われるつい三月前のできごとだったが、同じ頃朝鮮

にいる日本軍は戦局が膠着したのに加えて大飢饉と朝鮮人の執拗な抵抗に出会い、部将の中にすら投降する者が出る始末であった。彼らは「降倭」と呼ばれ、没収された日本側の鉄砲や刀槍類は直接朝鮮軍の軍備をかためるのに役立つことになった。つまり天下さまが花見に暢気に出かけて茶の湯などに遊び呆けている間に、鳴物入りで始めた唐戦は、その入口の朝鮮で二進も三進もいかないようになってしまっていたのである。一時はどう收拾のつけようもないほど慘澹たるものになっていたが、戦線の武将たちも秀吉の指示をのんびり待っているわけにはいかない。なんとかしなければならぬ。そうして小西行長の使者が明の国に皇帝に謁して和議へ持込む目途が立ったのが、ようやくこの年の十二月になる。しかもなお秀吉と明使の接見までに一年半もかかることになるのである。

しかし都では、戦の情報よりもその頃はもっと別の話で持ちきりになっていた。聚楽亭の関白さまが荒れてなさるぞという噂である。

関白豊臣秀次は、秀吉の甥である。秀吉は鶴松夭折の折、それをいたく悲しんでもはや自分に実子の恵まれることはあるまいと諦め、秀次をたてて豊臣家二世とさだめた。そのとき秀次は二十四歳、秀吉は自分の後継ぎとするには心許なく思ったものか、実に細々とした教訓を与え、秀次の方でもそれにそむかぬために八百万の神々に誓い、起請文に血判まで押して奉った。家督相続にしては仰々しいが、秀吉の後を継げば日本全土が手に入るのだから、このくらいのことでは当然だっただろう。

ところがそれから二年たって、御運の強い二の丸さまがまた男児を出産してしまったのだ。秀吉は伏見に城を築いて、子供は母親と共にその西の丸に移り、秀頼と名付けられた。

血縁の情が人一倍濃い秀吉は、当然自分の天下は甥よりも実子に譲りたい。そうなって見れば関白秀次のすることやること気に入らぬことばかりである。伏見へ呼びつけて叱り、聚楽へ乗りこんで言

いきかせ、あるときは秀次の娘を秀頼の妻に迎え、秀次の世嗣にすると言ってみたり、お拾が生後何ヵ月もたたないうちから秀吉の頭の中は唐戦かちいくさより朝鮮の現状より、自分の跡目相続の件で一杯になつてしまつた。

天下さまのこういう有様を見て一番早く我が身を悟つたのは誰よりも関白秀次その人である。もはや自分の天下は譲られたところで長くはないのだと見てとつた秀次は、根が賢くないだけに自暴自棄に陥つて行つた。乱行を始めたのである。

「お国よ、右近の馬場に小屋掛けせいで、よかつたぞ」

四条河原よりよい場所はないかと都の中を歩きまわっていた三九郎が帰つてきて、声をひそめて言つた。

右近の馬場というのは北野天神の社地で、月次祭つきなみのまつりの賑わいといえは年々高まる一方である。お国は早くその祭りに小屋をかけて、何年も前に大坂の天満天神の鸛替うそかえで全身が酔つたときのような思いをもう一度してみたいと念じ続けていたので、三九郎の言葉が不審で訊き返した。

「なんでじゃえ」

「関白さまが鉄砲の稽古に北野へ出なされて、百姓一人撃ち殺されたそうな」

「えッ」

「畑仕事していたものを狙い撃ちされたのじゃと」

驚いたのは、お国だけではなかった。勘じとまめは顔を見合わせたし、他の女たちは震えあがつた。中でもお鶴とお松は、

「まさか、畑仕事の百姓を、鉄砲で」

と繰返して　しばらく茫然としていた。守口の里のお婆なら、この話を聞けば怒号せずにはおくまいとお国は思った。

「されば西の京は鎮まり返って、どの家も戸を閉たてて外出そとでせぬとよ。右近の馬場さえ、唄も踊りも聞こえぬわ」

「私らが小屋がけしているのは大事ないのかえ」

「大事なことも。鴨の河原は東の京よ。関白さまも伏見へ遠慮で、とてもここまでは遠出すまい」

「それでも鉄砲は目に見えぬ先まで飛ぶという話じゃもの」

「なに、天下さまに聞こえるところではやるまいぞ。安心せ」

「天下さまは、そんな関白さまを、なんで放っておかれるのである」

「されば面白いと思われまいよ」

秀吉はもともと面白くないのだ。そこで秀次は一層面白くなくなって、その憂さ晴らしに鉄砲遊びということになったのだから、西の京の百姓たちはたまらない。災難は一人や二人には止まらなかった。

さすがに秀次の側近たちも諫いさめたのであろう。地下人じげんたちの苦情が伏見城へ届くのを懼おそれる者もあったのに違いない。鉄砲の狙い撃ちは、やがて止まったが、今度は聚楽亭の前を通りかかった小者とらえて、弓の稽古の代わりにして射殺すようになった。この噂もたちまち都中に流れて、天下さまもとんでもない甥御を持たれたものだ、あれでは摂政関白のうて、殺生関白よと人々は呆れ、しかしいつ災難が降って湧くか知れぬというので都の中も昼間から戸を閉さず家が殖ふえた。

「私らも小屋をしままいか」

心配してお国も言い出したが、

「いや、なんというてもこの辺りは都というても伏見に近い。案ずることはあるまい」

と三九郎は何やら自信ありげに言う。しかし、関白秀次は鉄砲と弓に倦きたあとは、今度は刀のためし切りに凝り出して、切られたい者には金子を与えるという布令を出したという噂もたつた。だが命あつての物種で、金子を貰つてでも死にたいという者は都の物好きの中にもいなかった。で、到頭いやがる者たちをからめとつて聚楽の城内へ連れこんでしまふようになった。事実はこのとき大名勢力と奉行たちの権力抗争が激しく、秀次はそのとき奉行方から最も仇敵視される不利な立場にいたので、これらの噂も奉行側が故意に撒き散らしたものであつたかもしれないのだが、人々はその理由が何かと考えるより、関白さまの荒れてることよと、ただ戦いくさいていた。冬の間はその噂がことに高く、人々は戸を閉ざした暗い家の中で、先行きはどうなるのであろうかと囲炉裏の傍で愚痴ぐちをこぼしあつた。

お国たちも、あまり噂が高いときや、雪の日、風の日、河原の小屋がけは控えるようになった。鴨川の水を渡る風は冷たくて、踊る方はともかくも、そういうときには人ひとり寄つては来ない。

しかし踊れない日はお国は淋しかった。健やかな手も足も、ただ踊りたいとそればかり思い続けているからである。踊れない日のお国はその分、唄の稽古に精を出した。勤じとともに、都の流行唄はやりうたをさらってみる。娘たちも厨仕事や水汲みを終えると集つてきて声を揃えた。

一夜来ねばとて

科しなもなき枕を縦な投げに 横な投げに

なよな枕よ

なよ枕

うへさに人のちかつく

煉貫酒ねりぬきざけの仕業かや

あち よろり こち よろよろ

腰の立たぬはあの人のゆゑよのう

興がのれば三九郎も朗々と詠うたい出す。彼の得意は謡曲「大江山」から巷に流行り出した一節であつた。

赤きは酒とがの科ぞ 鬼おにとな思しそよ 恐れ給はで 我に相馴れ給はば 興がる友と思すべし 我も
そなたの御姿 打ち見には打ち見には恐ろしげなれど 馴れてつばい山伏

況いはむや興宴みぎりの砌みぎりには 何ぞ必ずしも人の勸を待たんや

三九郎が素面で唄うようなことは、しかし滅多になかった。寒い冬の間、彼はずっと不機嫌で通した。彼の年来のもくろみが梅庵によって画餅に帰してからというもの、三九郎は鬱々うつうつとして楽しまなかつた。大江山の鬼のように彼はその間、お国よりも酒を愛するようになった。もつとも彼の酒癖は

悪くなくて、酔えば唄い、勘じやお国より自分の唄が正調たという自慢をした。三九郎が唄うのは謡が原曲であるものが多かったから、それは彼の主張するとおりである。勘じもお国も感心して聴き、何か会得することが多い。お国が三九郎の唄に立って踊ると、

「なんで躰が浮くか」

と、三九郎は叱った。唄の調子で浮かれ出す躰を、お国は鎮めるのに苦勞しながら踊り、しかし何故、浮いては悪いのだろうかと小さな疑いを抱き始めていた。

勘じもまめも酒を好まなかった。三九郎が独酌で、土器かわりけを傾けて飲むのを見守りながら、男たちは三九郎の好んで語る大和四座の話を聞かされていた。それは能樂が、南都興福寺という強大な背景を持って榮えに榮えていた頃から物語られた。やがて室町將軍の愛顧を受けていた頃の觀世座が、他の三座をひきはなした榮華のさまを語るとき、三九郎の頬は紅潮した。勘じもまめも、まるで見知ることのなかった世界の話だから、三九郎と共に興奮し、今の天下さまが金春座こんばるを眞眞のいもにしている事実などには無知なので、そして觀世座一門は徳川家康に庇護を求めていることなど一層知るよしもなく、彼らはただただ驚嘆して三九郎の話を聴いていた。まるで三九郎が、彼らの目には榮華そのもののように見えることがあった。二人の男がそういう反応を見せると、三九郎はいよいよ顔を輝やかせて、「じゃによつて儂はわし大望を抱いているのよ。觀世座の口伝くでんに、さりながら能は貴人のおんいでなくてはかなわじというのがある。儂らはこれを幼い頃からこの躰に叩きこまれているのよ。梅庵ごときの手を借りずとも、きっと天下さまに近づいて見しようぞ」

と背うんすいてみせる。

お国には、もう何年となく折にふれては三九郎から聞かされている話で、特に耳新しいことはなく、

感激を失っていた。それより、いつまでもいつまでも三九郎がその「大望」を捨てないのを不思議に思っていた。お国の正直な気持では、四条河原の小屋で踊るだけでも幸せなのだ。観客がいて、それが共に唄ったり踊ったりしてくれるだけで満足できるのである。できればより多くの客を集め、彼らの心を擲んで踊りたいというのが、お国のいわば「大望」なのだが、そこには天下さまの影もささなかつた。天下さまというのは、あの行列の最後に珍妙な顔をして白馬にまたがっていた小男のことではないか。どうして三九郎が、あんなお爺にお国の踊りを見せたいと思ひ、梅庵に退けられてからも天下さまに近づきたいと念じ続けているのか、お国には分らなかつた。

「お国も飲むか」

「あい」

三九郎がさせば、お国は受ける。初めて酒を口に当てたとき、お国はこれほどの美味がこの世にあるかと思つた。飲めばやがて躰が火照つて、立てば蹠が雲を踏むようになる。躰が空に浮くようであつた。これが酔うということだろうかと、お国はうっとりとした。その耳に三九郎の唄声が響く。赤きは酒の科ぞ、鬼とな思しそよ。恐れ給わで我に相馴れ給わば、興する友と思すべし。

「踊らぬか、お国」

「三九郎が唄えば」

「おっと、よしよし」

独り寝けるもの寝られけるもの

習はしよの身は

習はしものかの

独り寝はするとも 嘘な人は嫌よ

心は尽いてせんやのう

世の中の嘘が去ねかし 嘘が

人は嘘にて暮す世に

何ぞよ燕子が実相を談じ顔なる

吹くや心にかかるは

花のあたりの山嵐おろし

更くる間まを惜しむや稀まれに逢ふ夜なるらん

此 稀に逢ふ夜なるらむ

酔いが深まると三九郎も陶然とうぜんとして、お国の踊りを指図せず、瞑目して唄う一方だし、お国もいい
気持で心の向くままに浮いた躰で踊っていた。三九郎が言うような貴人の御出がなくても、踊りは踊
れるではないかと思う。花の唄になると、お国は春を待ちながら踊った。冬は三九郎が酒で暖をとり、
お国も酔って楽しいけれども、早く春がきて鴨の河原の柳の枝が飴色に芽吹かぬものか。そうすれば
都の人々も、花をめ、踊りや唄を見に家からぞろぞろと出てくるだろう。家の中で三九郎と二人で

酔うよりも、やはりお国は群衆の前で踊りたい。

春を待っているのは、お国だけではなかった。お加音^{かお}も、お鶴お松の姉妹も、いや男たちも三九郎も、皆それを待っていた。何しろ冬の間は文字通りの冬籠りで、することは何もないのであった。青魚釣りも冬は毎日出かける楽しみにならなかったし、若い娘たちもいくら寒いといって家の中で躰を動かさずにいるのは辛い。しかし正月が近づくと女たちは布裂や小袖を陽だまりにひろげて、小さな針をチカチカ光らせながら、それで身を飾って踊る日の用意に余念がなかった。勘じとまめの二人は雪が消えるとすぐから鴨の河原へ出かけて行って、小屋がいたんでいないかどうか、板一枚盗まれてはいまいかと見張って、それも彼らの春を待つ支度であった。

殺生関白の噂で暗く澱んだ冬を過した都の人々も、春になると柳の緑と同じように一斉に息を吹き返した。四条室町は再び町衆の集いによって活気づいた。それを煽^{もよほ}りたてるように河原では鑿や鼓が鳴り響く。四条河原はお国たちの小屋の他に辻能の蓆掛けや、猿若一座、他に見世物や昔の風流の名残りに似た者たちがあちこちに小屋がけして、思わぬ賑わいになっていた。

「今年は花が早いとよ」

「道理よ、鴨の水さえ温^{ぬる}んだもの。青魚の子が、わっとばかりに殖えたわ」

早咲きの花の噂が聞かれるようになった。天下さまが都をお土居で囲ってから、囲いこまれた都人は却ってお土居の外へ遊び心を誘われるようになっていた。

三九郎の考案して建てた小屋は、四条河原では文字通り一頭拔きん出ていた。板囲いでがっしり建てた外側の堀も立派だったし、何より中に客の位置より高く舞台を造ったところが観ものになった。女たちの数も、これだけ多く揃っているところは他になかったし、河原へ出た人々の足は思わず惹き

寄せられた。まめが入口に立つて、覗き見しようとする人々から銭をとって中に入れる。客の出口は別にしているので、見飽いた客はいつでも出て行ける仕掛けになっているのだが、流行唄は客たちもいつか夢中で声を揃えて唄うので、客席はほとんど詰まる一方だ。荒削りの板囲いでも小さな小屋であることに変わりはないので、小屋はたちまち一杯になった。舞台に立ったお国は、長かった冬が駆け足で通り過ぎたあとのように、熱気のこもった小屋の中で、板張りの舞台を勢よく踏んだ。すると床板はお国の躰に応えるように、弾んだ音をたてた。お国の打つ鑼と、三九郎の鼓、ときにはまめの太鼓にも混って、床板はいよいよ楽しい合ノ手を鳴らす。お国の躰も弾みに弾んだ。

その頃、伏見城西の丸から出た女輿が僅かな供廻りを連れて鴨川添いに鹿ヶ谷へ向っているのを、小屋の中にいる者たちはもちろん誰も気がつかなかった。一行の案内役には、施薬院全宗がいて、彼はそろそろ七十に手の届く齡であるのに大層な元気で坊主頭を振りたてて勢よく馬を駆け、天下さまの愛妾に道で無礼を働く者のないように辺りを睥睨していたが、四条河原を見下して、ふとお国の小屋に首を傾げた。鑼の音色と念仏踊りの声名に聞き覚えがある。彼は秀吉側近の医師団では筆頭格の医者なのだが、薬の調合より天下さまの機嫌をこまめに伺う方が得手な男だったので齡に似合わず動きが捷い。このときもそう思うとすぐ馬の首を四条河原へ向け直して鴨の堤から駆け降りた。

小屋の正面の板塀の高さは、五条の橋の袂に建てたときと同じ寸法で、馬上の人間からは中がまる見えになる。中を覗いた施薬院全宗は、いきなり舞台の中央に立っているお国に声をかけた。

「やれ珍しや、末吉勘兵衛が家にて出会ったのう」

お国も驚いたが、三九郎は鼓を打ち損うほどびっくりした。天下さま御薬師衆の施薬院全宗から思いがけずじきじきにお声がかかりがあったのである。しかも相手は平野の末吉勘兵衛の家で出会ったと